

# nāmarūpa

CATEGORIES OF INDIAN THOUGHT



**HOYSALA BRAHMIN  
SRI K. PATTABHI JOIS  
EDDIE STERN**



# nāmarūpa

Publishers & Founding Editors  
ROBERT MOSES & EDDIE STERN

Advisors

DR. ROBERT E. SVOBODA  
MEENAKSHI MOSES  
JOCELYNE STERN

Editors

MEENAKSHI MOSES  
EDDIE STERN

Design & Production  
ROBERT MOSES  
EDDIE STERN

Diacritic Editors  
VYAS HOUSTON  
ISAAC MURCHIE  
ZOË SLATOFF

Assistance from  
DEBORAH HARADA

Website Development  
MATT ALEXANDER  
KENDAL KELLY  
ROBERT MOSES



SRI K. PATTABHI JOIS



SRI SWAMI VISHNU-DEVANANDA

NĀMARŪPA uses diacritical marks, as per the chart shown to the right, for the transliteration of all Saṁskṛta words. While many of the articles do contain these marks, it is not a universal occurrence in the magazine. In those cases where authors have elected not to use diacritics, Saṁskṛta words remain in their simple, romanized form. Chart by Vyaas Houston.

## ISSUE 13 VOLUME 04 APRIL 2011

### 1. HOYSALA BRAHMIN SRI K. PATTABHI JOIS *Eddie Stern*

*Cover: Sri K. Pattabhi Jois in Ambiga, Karnataka, South India 2007. Photograph by Eddie Stern.*

अ	आ	ए	ई	उ	ओ	ऊ	औ
a	ā	e	ī	u	o	ū	au
ऋ	ऋ	ए	ऐ	ओ	ओ	ओ	ओ
r̥	r̥	e	ai	o	o	o	ah
क	ख	ग	ঘ	ঙ	ঙ	ঙ	ঙ
ka	kha	ga	gha	ঙা	ঙা	ঙা	ঙা
চ	ছ	জ	ঝ	ঝ	ঝ	ঝ	ঝ
ca	cha	ja	jha	ঝা	ঝা	ঝা	ঝা
ট	ঠ	ঢ	ঢ	ঢ	ঢ	ঢ	ঢ
ta	tha	da	dha	ঢা	ঢা	ঢা	ঢা
ত	থ	দ	ধ	ধ	ধ	ধ	ধ
ta	tha	da	dha	ধা	ধা	ধা	ধা
প	ফ	ব	ভ	ভ	ভ	ভ	ভ
pa	pha	ba	bha	ভা	ভা	ভা	ভা
য	ৰ	ল	ৱ				
ya	ra	la	va				
শ	ষ	স	হ				
śa	ṣa	sa	ha				
ঞ	ত্ৰ	জ	ঞ				
kṣa	tra	jñā					



HOYSALA BRAHMIN

ホイサラ朝の司祭

シュリ・K・パッタビ・ジョイス

文：エディ・スターイン

翻訳：福永美奈子

SandhyaVanda を行うグルジ (2007年 ゴクラムにて)

Sandhya は結合、Vandan は礼拝を意味し、SandhyaVandan とは、「聖紐の儀式」を終えて成人の仲間入りをし、精神的な生活を実践するヒンドゥー教の男性によって執り行われる儀式。

# **HOYSALA BRAHMIN**

**SRI K PATTABHI JOIS**

**EDDIE STERN**

# **HOYSALA BRAHMIN**

## **ホイサラ朝の司祭**

シュリ・K・パッタビ・ジョイス

文:エディ・スター

翻訳:福永美奈子

この記事は Namarupa Issue13 Volume04 (2011 年 4 月号) に掲載されたものです。Namarupa 共同発行人であるエディ・スター、およびロバート・モーゼスの同意のもと翻訳・配布しています。<http://www.namarupa.org/>

私は、ここで、アシュタンガヨガの師、シュリ・K・パッタビ・ジョイス(グルジ)がヨガを学ぶに至った世界観について、簡潔な検証を試みようと思う。グルジにとってのヨガというものは、私達、西洋人の受け止めているヨガとは明らかに異なる背景がある。私達にとってのヨガは異国のものであり、勿論、大きな喜びが伴ってはいるが、そこに自身を適応させてきた。しかし、それでもなお、ヨガには私達の文化に享受されなかった(できなかった)ものが存在する。グルジにとってのヨガは、その地で生きる人々の精神的なところも含む文化やインドという国、そして、彼の生まれ育った南インドの、私達から見れば寂れた小さな村といった、その全てそのものなのである。

長年、グルジは西洋人を理解することに努め、ヨガが形成されてきた背景にある規律や道徳的価値観への理解がほとんどない私達に対して、いかにしてそれを伝えていくかに取り組んできた。パッタビ・ジョイスが 12 歳の時に家を出て、その後、22 歳で若くしてマイソール・サンスクリット大学のヨガ部門の初代学部長となったことは、多くの人が聞いたことがある話だろう。その上、マイソールの王・マハラジャにヨガを教えたことは、まさに偉業である。しかし、グルジの本質について理解するためには、そういう偉大な経験以上に、彼の生まれ育った文化への理解が私達により深い知見をもたらすといえる。

世界のほぼ全ての信仰と同様に、ヒンドゥー教の伝統は広く多様でいくつの宗派に枝分かれし、その一部については対立したものである。それゆえ、必ずしも1つの結合したヒンドゥー思想があるとは言えない。ある考え方は無批判で受け入れられているが、様々な結論が伴うこともある。例えば、カルマ(行為)、ダルマ(宇宙・人間等の本性)や輪廻転生という観念、プラフマン(根本原理)に関する様々な見解、あるいは神の姿形に対する概念があげられる。そして、それぞれの宗派のなかで、その教えは現世代から次世代へと代々継承されていく。この継承のことをパランパラ、または系統という。パランパラ、継承していくものは、どんなものであれ物語を生み出し、その物語の世界の中に後継者が生まれる。彼らにとってその物語が世界の見方を定めるレンズであり、人生・労働・喜び、そして死についての理解を定める価値観となるのである。

### **パランパラ**

伝統には、例えば儀式や何かの実践方法、または料理法であっても、何か生き生きしたものを伝えていくという効能がある。その生き生きしたものとは、常なる流れ、絶え間なく巡るようなものであり、そして、知識の流れという精神性との関係のなかに存在する。その流れの中に足を踏み入れる時、私たちは先史を築いてきた先人達の精神や経験から満ち溢れる知識のなかに身を浸す。だからこそ、力と権威が生まれるのである。これには、多くの異なる精神生活へのアプローチがある。例えば、その一つは、成し遂げたいことへの想いを抱き、その実現を目指すことである。多くの人々がこの方法を選択する。もし、私たちがその想いに対する執着のなかにいるとしたら、それが限界をもたらし、結果が限定されたものとなってしまう。もう一つの方法は、放棄である。それは自身の知識を超えたものを学びたいという欲求に対して身を委ねることを指す。何か特定のものを自ら学び取るのではなく、特定のものがもたらすことを学ぶことである。言い換えれば、自身を変化させるのではなく、変化させられるのである。このアプローチをとることで、エゴ(自我)は脇においやられ、安定がもたらされる。なぜなら、それは何かをつかみ取るのではなく、内へと吸収するからである。完全で完結し達成されたものを得る感覚の為に、何かを得ようとするのではない。既に内なる存在は、完全で完成され熟達されているのである。その精神的な生き方のために身を委ねるというアプローチをとること、それは、自分好みの方法に教えを変化させたりせず、教えそのままの流れに自身をまかせることである。その時こそ、真に深い学びを得ていくのである。さらに、私たちが自身やその人生に望んでいることは、月日と共に移り変わっていくものである。例えば、私達は、ムクティ(解脱)、あるいは解放のために努力する目標を持つかもしれない。しかし、私達がとらえるムクティ(解脱)というものに固執しすぎてはならない。実際、ムクティ(解脱)とは、概念という形で私達の精神が抱けるものではないのである。これは新しい考え方ではない。私はグルジのもとでのプラクティスを通して、別々のタイミングでこの両方のアプローチを実践し、後者のアプローチ(身を委ねること)はグルジの方法論と一致していることに気づいた。グルジは私達を何度も叱った。グルジは、答えを求めて質問をしそうぎのではなく、ただ実践していくなかに、自身で見つけうる答えがあるということの気づきへと導いてくれたのである。

ヒンドゥー教の世界で、世代から世代へとその伝統が引き継がれていくなかで、その伝承のなかにある知識が失われることはない。私達の社会では、いかに多くの素晴らしい職人たちの技術が、それが継承されなかつたことによって消えていったことだろう。インドにおける理想とはその智慧を守り、引き継いでいくことにある。たとえば、その一つが、まさに、ヨガである。伝統のなかにある精神は、その純正さと継続性によって生き続ける。ヨガでさえ、それが困難な時期もあった。クリシュナマチャリアが実践的なヨガを学

ぼうとした時、彼は聰明なグル(師)を見つけるために何千マイルも旅をせねばならなかつた。クリシュナマチャリアの教えが、弟子たちを通じてヨガを甦らせ、彼らの信念と確信によって世界的な現象となつていった。バガヴァッド・ギーターのなかで、クリシュナはアルジュナに、ヨガの教義とその衰退と再生について、簡潔に二つの節のなかで次のように語つている。

「このように、王仙たちは、この伝承されたヨーガを知つてゐた。しかし、そのヨーガは、久しい時を経て失われた。(2)  
私は今、まさに、この古のヨーガをあなたに説く。あなたは私を信愛して、友であるから。實にこれは最高の秘説である。(3)



1930年、グルジが村を出た時、マイソールに向かうために電車に乗ったアンプガ駅の地図



ヴィシュヴァーミトラが苦行をしたといわれる場所(コウシカ)

グルジは多くの優秀な思想家、芸術家、宗教的主導者の輩出を誇るカースト(インドの身分制度)に生まれたが、彼が求めていた知識は生まれ育った場所では得られるものではなかつた。それは、唯一、クリシュナマチャリアと通ずることや、のちにマイソールのマハラジャの大学で何年も過ごしたことによってのみ得ることのできるものだった。そして、やがて彼が受け継いだ偉大な遺産への集中的な取り組みが、最終的に彼の人生を方向づけていったのだった。

## 王・コウシカ

グルジは南インド・カルナタカ州の小さな村・コウシカに生まれた。以前、グルジの孫シャラスと私がコウシカにいた時、グルジは私達を、向かい合う石柱に囲まれた小さな建物のところに連れて行ってくれたことがあった。そこは、次に述べる物語にまつわる場所だった。それは、その昔、偉大で人々から愛されたコウシカという名の王であった聖者ヴィシュヴァーミトラの話である。彼は思いやりのある気質と、また気性の荒い性格で知られていた。かつて、この偉大な王コウシカは、森のあちらこちらで戦っていた。そして、ある時、聖者ヴァシスタのアシュラムを見つけたのだった。

ヴァシスタは王コウシカ(ヴィシュヴァーミトラ)を親切にもてなした。王は自軍の兵士の数の多さを考えて断ったが、ヴァシスタが是非にと強く申し出たので王はその好意に甘えることにした。ヴァシスタは、聖なる牛カマデヌを呼び寄せ、王宮の調理場でさえ作ることができないような、これまで味わったこともない珍しくてとても美味しい食事を給仕させた。ヴィシュヴァーミトラは、これに大変驚き、いったいどうしたらこのような隠遁者が、王でさえなすことのできないような偉大な能力を持つことができるのかと不思議に思った。

無限になんでも与えることのできる聖なる牛カマデヌの偉大な力に気づくと、ヴィシュヴァーミトラはカマデヌこそ王宮に見合った牛だと言って、100頭の牛を与える代わりに差し出すよう求めた。聖者ヴァシスタが、カマデヌは神に仕える牛であるため渡せないと説明したが、王コウシカの強い要求によって、彼は応じざるをえなかった。王は家臣たちに牛を連れていくよう指示したが、彼らが彼女(カマデヌ)に近づいた時、彼女がその体をくめめたその瞬間、数千もの兵士たちが現れて、ヴィシュヴァーミトラの家臣たちは、あっという間に殺されてしまった。これに王は激怒して、この聖者に戦を挑んだ。ヴァシスタが聖なる牛を手放さなければ殺すと警告したが、聖者ヴァシスタは、そのまま草の葉を地面に置き、その後ろで苦行を始めたのだった。

そして、王は開戦の合図をした。彼のありとあらゆる武器や弾薬は、草の葉によって完全に吸い込まれてしまい、聖者は傷ひとつ負うことはなかった。これにはヴィシュヴァーミトラも驚愕し、彼の全兵力をもってもかなわない、その苦行の力がいかに偉大であるかを悟った。

ヴィシュヴァーミトラは言った。

クシャトリヤ(バラモン教のなかの王族・武人階)の力をもっても役には立たないのか。ブラフマーリシの強さ、それはたった一人で私の武力すべてを破壊するほどの強さなのだ。(注1)

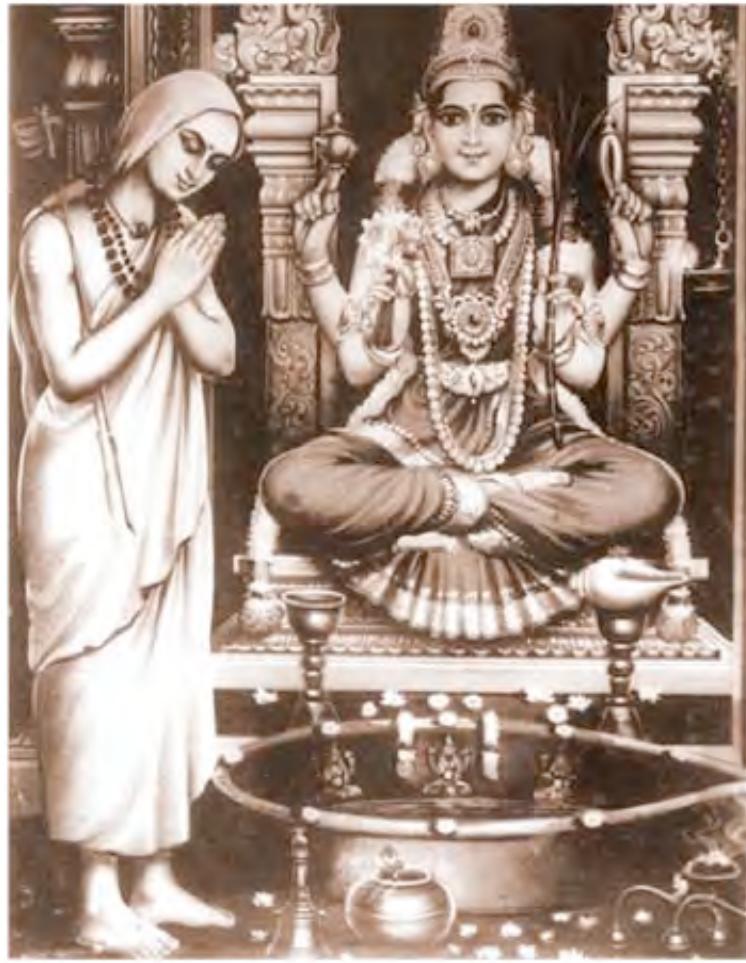
こう言って、ヴィシュヴァーミトラ自身もまた厳しい苦行を始めたのだった。  
地球上のそれぞれ異なる方角をむいて、数千年にわたってヴィシュヴァーミトラは苦行を続けた。しかし、とても魅力的な女性メナカの誘惑にのって彼は彼女と共に暮らすようになったため、こうして、彼の苦行は終わりを迎えたのだった。

もう一つの出来事として、カースト制度の最下層であるスードラが、武勇神インドラの世界インドラ・ローカ(天界)に送り込んでほしいと願ってヴィシュヴァーミトラのもとへやってきた話がある。ヴィシュヴァーミトラはスードラをヴァシスタのほうに行かせたが、ヴァシスタは断ったので、彼はそのスードラのためにインドラ・ローカ(天界)へゆくのに必要な儀式を執り行ってやった。その直後、スードラは天界に向かうことができたのだが、天界で足を踏み入れることを許されず、地界へと戻されてしまった。スードラは天界には自分の居場所がなかったと言ってヴィシュヴァーミトラに泣きついた。それならば自分がもう一つの天界を作つてやるから、そこにいればよいと、ヴィシュヴァーミトラは横柄に断言した。

スードラのための新しい世界を創造するという願いを成就すべく、ヴィシュヴァーミトラは新たに苦行を開始し、まさにこのコウシカの石柱に囲まれた小屋で彼の苦行は成就したのだった。



先祖代々の家の前に立つグルジの兄夫妻(コウシカにて)



女神サラダンバ(サラスヴァティ)に祈りを捧げるシュリ・アディ・シャンカラチャリヤ(カルナタカ州のシュリングエリ)

ヴィシュヴァーミトラの苦行の威力と勢いの結果としてインドラ・ローカ(天界)が燃え始めたため、天界の神々は急いでプラフマーとヴィシュヌに助けを求めた。神々は2人の神に、直接、ヴィシュヴァーミトラと話してみてほしいと頼み込んだ。

そこで、プラフマーが地界に降り、ヴィシュヴァーミトラにプラフマーリシのタイトルを授けるかわりに苦行を止めるよう求めた。しかし、ヴィシュヴァーミトラは聖者ヴァシスタが、ヴィシュヴァーミトラをプラフマーリシとして認めるまで従おうとしなかった。

そして、二者の間にはまだ不満が残ってはいたものの、聖者ヴァシスタはヴィシュヴァーミトラをプラフマーリシと宣言した。その宣言によってようやく、ヴィシュヴァーミトラは苦行を完結させたのだった。

このような出来事が起こった、まさにその場所が、ここコウシカのこの地であると信じられている。ヴィシュヴァーミトラの別名が王コウシカであることにちなんで、この村はコウシカとして知られるようになった。(グルジのカンナダ語からの翻訳)

このように、グルジの幼少時代の遊び場はインドの有名な叙事詩に深くゆかりのある場所であり、彼はこういった環境に生まれ育ったのである。コウシカの村には、当時約60のプラフミンの家族が暮らしていた。その大部分が、ホイサラ・カルナタカンと呼ばれるグルジのカーストであり、残りはサンケティ・プラフミンであった。これらのカーストは、数多くのヴェーダ(ヒンドゥー教最古の聖典)の学者、僧侶、司祭、音楽家、哲学者を輩出したことでも知られていた。名高いホイサラ朝のカルナタカ人のなかには、アドヴァイタ・ヴェーダンタ哲学(不二一元論)の研究で知られていたシュリングエリ・ムット(ヒンドゥー教シャンカラ派の総本山)の司教マーダヴァ・ヴィデヤランニヤもいた。また、もう一人、ホイサラ・カルナタカ・コミュニティの有名な人物に、グルジの師、シュリ・チャンドラシーカレンドラ・サラスヴァティがいた。彼は、カンチ・カーマコータイ・ペータ(アディ・シャンカラチャリヤによってカンチに設立された僧院)の故・世師であり、数百万ものヒンドゥー教徒や西洋人も含む他宗教の信奉者にインスピレーションを与えた謙虚で実直、慈善の心と精神的な本質をあわせもつ聖者でもあった。

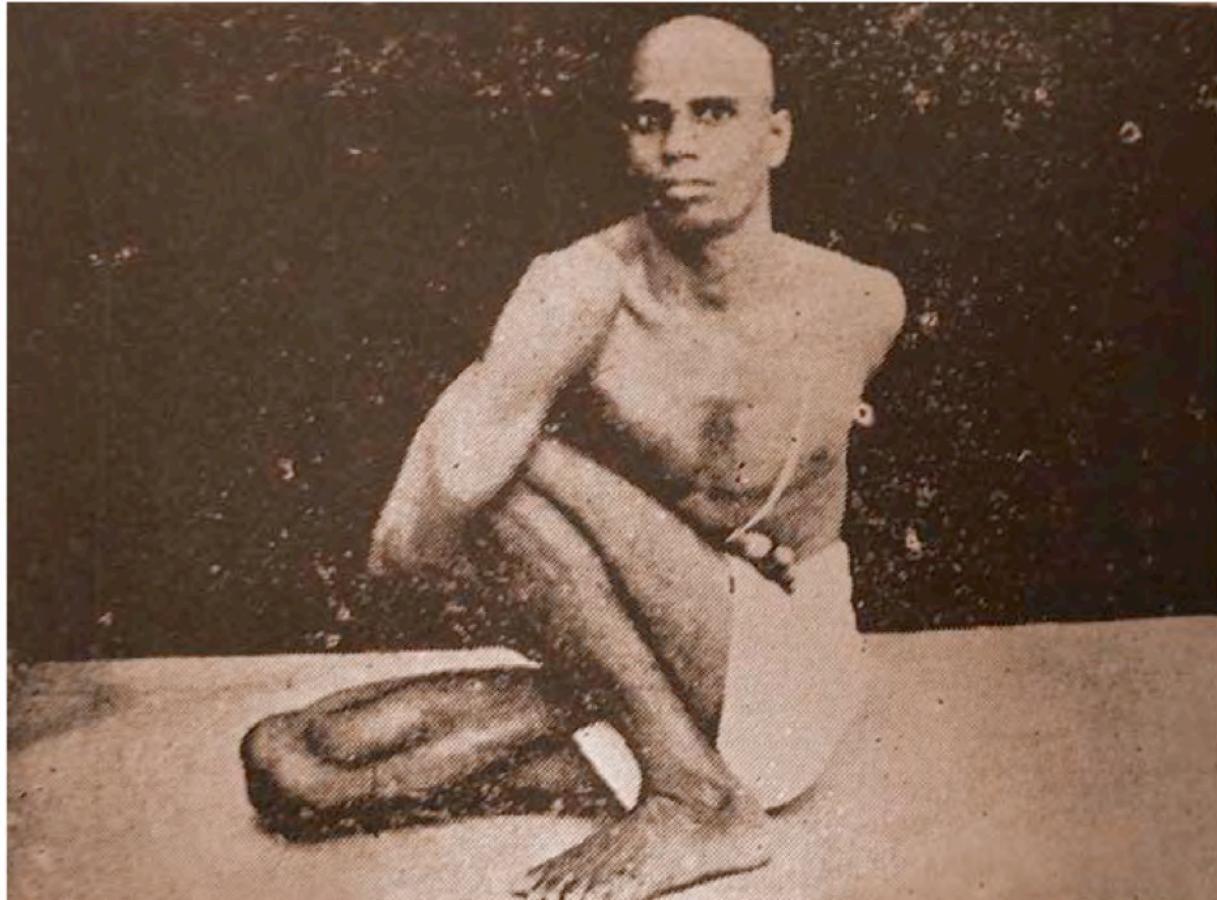
ホイサラ朝は、1117年(\*注2)にまでさかのぼった時代から3世紀にわたってカルナタカを治めていた王朝である。中等教育に入るまでの幼少時代、グルジは自由奔放な子供だった。色々と手伝いを言いつけられる家にはほとんどいることなく、友達と遊びまわり、トラブルを起こしては怒られ、騒々しい遊びをしてばかりいた。グルジはコウシカの森で過ごした日々のことを、「二日も三日も家に戻らず、森で遊んでばかりいたものだ。夜はそのあたりの寺院で眠ったりしてね。」とよく話していた。中等学校に入ると、次第にグルジは非常に勉強熱心になっていき、地域の学識者や、特に彼がとても惹きつけられていたクリシュナマチャリアと関わることに興味を抱くようになっていった。

グルジは、聖紐の儀式(ヒンドゥー教の少年は一定の年齢になると神聖なる知識の象徴として聖なる紐を与え授ける儀式を受け)を終えたあとも、熱心に本を読みふけていた。そんなグルジを見て、彼の家族は「うちの子は、ラーマーヤナかマハーバーラタの学者にでもなったのだ。『さあ、聖なる牛の番でもしておいで』」と皮肉をこめて言っていた。グルジの母親は、彼の勉強への熱意がそんなにも膨れ上がるとは思っていなかったため、貴重なお金や時間の無駄だと考えていた。しかし、ラーマーヤナやマハーバーラタの無数の挿話や、彼を壮大な歴史に目覚めさせた地元の有識者達とのつながり、そして彼の故郷が有する信仰上の影響力はグルジにとってとても大きなものであり、次第に、バガヴァット・ギーターを勉強したいという想いやクリシュナマチャリアのようにサンスクリット語を学びたいという願いが強くなっていた。

そして、グルジは、叔父の畑からココナツを摘み取るだけの将来しか見えないコウシカでの生活に耐えられなくなった時、ドーティ(ヒンドゥー教の男性が着用する腰布)2枚と朝の祈りの儀式で使う器を鞄に詰め込み、マイソールへと旅立ったのだった。

### シャンカラチャリヤとスマルタ・プラフミン

ヒンドゥー教には、一般的な基本となる3つの宗派がある。それは、ヴァイシュナヴァと言われるヴィシュヌ神を崇拜する人達、シヤイバと呼ばれるシヴァ神の信仰者、そして、シャクティという女神を信奉する人々のことを指す。そして、第4の宗派を確立したのがアディ・シャンカラチャリヤ(西暦 788-820 年 ※注 3)である。彼は優れた哲学者であり、また、8世紀にアドヴァイタ・ヴェーダンタ哲学を唱えた偉大な聖者であった。第 4 の宗派とはスマルタ・サンプラダヤ(自由主義、無党派を指し、派閥性がなく主要な全てのヒンドゥー教の神々を信仰する)という、時の経過とともに広まつていった宗派である。シャンカラチャリヤは、ジョイナー族のグルであり、グルジはこの伝統の中に生を受け、シャンカラチャリヤの哲学的思想、世界観、神、その崇拜方法論を強く信奉していた。



マリーチ・アサナ D をとるグルジ(初版ヨガ・マーラより)

グルジは、自我、世界、神、その崇拜の方法論において、シャンカラチャリヤの哲学的な思想を支持していた。スマルタの伝統には、シヴァ、ヴィシュヌ、シャクティ、そして、ガネーシャ、スーリヤ(太陽神)、スカンダ(スプラマニア)の三神を含んだ、その全ての神々が平等で絶対的なもの、つまり、1人の神であるという考え方があった。一族の慣習、あるいは個人的志向によって、信奉者はそれらの神々のなかから1人の神を選ぶのだが、そのすべての神々にも日々祈りを捧げる。日々のプジャ(儀式)においては、自分が選んだ神(イシュタ・デーヴアタ)をプジャの器の中心に置き、その周りに他の神々を配置する。そして、最初に自身の神に祈り、続いて他の神々へ祈りを捧げる。

シャンカラチャリヤは非常に知識豊富で影響力のある指導者だった。32年というその短い生涯でバガヴァット・ギーター、ウパニシャッド、ブラhma・ストラに関する貴重な注釈書、また、深い信仰心に基づいた何百という詩歌を残し、その多くが今日でも広く日常的にインドの人々に愛されている。最も彼の名前を有名にしたのは彼の非二元論についての教えである。非二元的現実がヴェーダンタの究極の意味であり、次の言葉がそれを最も結論づけている。

*Brahma satyam, jagat mithya, jivo brahmaiva na aparah*

プラフマン(根本原理)は現実である。世界は非現実である。自己こそがプラフマンなのである。

「神はひとり。ふたりと存在するものではない。」かつて、グルジはこの教えを簡単に要約してよくこう言った。

神は本当に、常にあらゆるもの・あらゆるところに存在しているのだが、常にその全てのもの・全ての場所に私達の意識を向け続けることは不可能である。その上、私達の精神は物質で出来ており、光明(サットヴァ)・活動(ラジャス)・安定(タマス)という3つのグナと呼ばれる物質で構成されている。したがって、精神はまさに金属のように铸造可能なものなのである。それゆえ、特定の方向に精神を集中させるために視覚的な1つの対象が必要となる。イシュタ・デーヴアタの神像は、清く純粋で光明(サットヴァ)を放つものである。これには密かな意味が込められており、献身の心をもって祈り奉仕するとき、私達の魂の本質が持つ思慮深さと光明もまた増していく。そして、神、自身、この世界と私達の関係は哲学的な方向へと移行していく。これは、第一に、精神的なプラクティスを導いてくれるものへの理解と内面的な熟慮への移行である。しかし、形のないものに対して精神を集中させ、瞑想することは非常に難しいものである。

だが、非顯現なものに専念した人々の苦労はより多大である。というのは、非顯現な帰結は、肉体を有する人々によつては到達され難いから。

(バガヴァット・ギーター 12章5節)

敬意と献身の心で精神と感情を集中させるために神像は重要である。形のないものに対して意識を集中させることは可能ではあるが、実際、それを成し遂げることのできる人々といふのは非常に稀である。おそらく、そういう人達も、ある時点では、精神を純粋な状態に導くために、無形のものに投影したある種の対象物を描いたことがあるだろう。いったいどのようにして物質に執着する私たちの精神が形のないものと通ずることができるのであろうか。無形のものに意識を集中させることができいかに稀であり、難しいかというのは、こういうところにある。

したがって、シャンカラチャリヤはアドヴァイタ(不二元論)信奉者として知られており、その思想は、一般に無形無名であり、思考の及ばない神との関係性の哲学とされる。しかし、スマルタ派は、献身、愛、放棄の精神を生み出すため、いくつかの神々への崇拜に没頭し、そこから精妙な黙考に適する心的資質を作り上げる。彼らは、献身の対象として1つの視覚的に存在する物を選び、魂と心のつながりを通して、自身の意識を集中の状態へともっていく。パタンジャリはヨガ・ストラのなかでこれについて、「神に全てを任せることによって、サマーディは達成される」「サマーディ シッディ イーシュヴァラ プラニダーナ」と記している。イーシュヴァラ(自身の神)への崇拜やプジャ(儀式)を通して、神に全てを委ねるということが私達自身に浸透していくのである。ウパニシャッド最大の哲人・ヤージュニヤヴァルキアは、彼の古書ヨガ・ヤージュニヤヴァルキアにおいて10のヤマの1つがイーシュヴァラプジャ(視覚的に存在するもの・自身の神への祈りの儀式)であるとさえ述べている。

サマーディは、ある種の同一性を意味する。精神は沈思されている対象物の性質を帯び、私たち自身は瞑想をしているそのものになっていく。ウパアサナ(神のそばで崇拜すること)、あるいは1つの神に祈りを捧げるとき、内なる自己が神そのものと同一であることに気づいてゆくのである。



コウシカにあるシヴァ・テンプル

ある種の同一性(心の静寂ともいう)を暗示するもう一つの言葉が「サマトヴァ」である。バガヴァッド・ギーターに次のような節がある。

*Yogasthah kuru karmanisangam tvaktva Dhananjaya  
Siddhya asiddhyo samo bhutvasamatvam ucyate*

アルジュナよ、執着を捨て、成功と不成功を平等(同一)のものと見て、ヨーガに立脚して諸々の行為をせよ。  
ヨーガは平等の境地であると言われる。

(バガヴァッド・ギーター第2章48節)

しかし、このサマトヴァ、あるいはサマーディにはある前提があり、その前提とはヨガの実践における基礎でもある。シャンカラチャリヤは、アパロクシャヌブティ(シャンカラチャリヤによるアドヴァイタ・ヴェーダンタ哲学の書)のなかでこう言っている。

Nitya abhyasadrte praptina bhavet saccidatmanah.  
“完全なる真実・意識であるアートマンは、継続的な実践なくして得ることはできない”  
(アパロクシャヌブティ 101)

彼は、ニッデヤーナサナ(深い瞑想)の実践を可能にするために従うべき15項目を挙げている。これらの15項目には、ポーズ、根底の抑制、身体の均衡、視覚の安定、呼吸のコントロールがあり、つまり、サンスクリット語で言うところの、アーサナ、ムーラバンダ、デーハサンヤ、ドリスティ、プラーナヤーマである。こういった言葉が、ヨガを実践する人々には馴染み深い言葉であるのは言うまでもない。シャンカラは、これらそれぞれのヨガの実践において、奥の深い内面的な意味合いを含ませている。たとえば、アーサナについて次のように記している。

**我々は、真のポーズとは、プラフマンの瞑想において無意識に絶え間なく流れるものであり、  
決して、幸福を壊すようなものではないということを知るべきである。**

(アパロクシャヌブティ112)

しかしながら、いわば、これは基本的にヨガの最終段階であるということを理解するのも非常に大切である。私達には、様々な感情、人間関係、社会生活を穏やかに送るといったような、まず、きちんとしなければならないことが山積みの状態である。そんな私達がこのような深い瞑想を得られていると自負することは、これもまた、1つの幻想でしかない。神への瞑想は、私達と様々なものとの関係の捉え方をサポートしてくれるものだが、それが現実逃避のためのものとならないように注意せねばならない。それゆえ、いわば、ムクティ(解脱)への橋を渡ることができるようになる前に、その心構えや身体・呼吸・精神の鍛錬が求められるのである。事実、シャンカラはアーサナとプラーナヤーマについても語っており、純粋な意識の絶対的で非常に深い状態について、奥深い精神的な意味を述べている。シャンカラチャリヤが口述的なヨギ独特の言葉で表現し、彼自身の哲学的志向に基づいていることを、私達は覚えておく必要がある。つまり、アーサナとプラーナヤーマは、ヨガの実践方法として知られているが、彼はそれを否定することなく、ヨガの実践における概念を広めようと共通の言葉を使用しているのである。

それゆえ、グルジの属する伝統では、この身体こそヨガの実践が社会生活における様々なものとの関係の重要性や概念に適応し、やがてはアートマンの実現へと導くとしている。事実、ヨガ・マーラのなかでグルジは、「ヨガ」という言葉の大切な意味の1つが、「関係性」だと述べている。すべてのヨガは準備である。私たちは、病に悩むことのないよう身体を安定させねばならない。感情によって自身を見失わないようその呼吸は穏やかでなければならない。好き嫌いといった感情によって、霧のなかにいる状態のように彷徨ないよう知覚器官は浄化されなければならない。哲学的概念への気づきには、こういったこと全ての能力が浄化されることが求められる。これはグルジにとってとても重要なことであった。「なにかを行う時は、その前に必ず神に祈りなさい。」よくグルジはこんなふうに言っていた。「最初に神に祈れば、その行為(あるいはヨガ)はしかるべき方向へと導かれていくだろう。神への祈りがなければ、何も達成することはできない。神はただ複数の名前をもつだけであって、存在はひとつ。プラフマー、ヴィシュヌ、シヴァ、どの名前を選んだとしても、神は唯一なのだ。あなたの信仰が何であっても、そこには神がいる。」さらに、グルジはこう付け加えた。「このような神と私達との関係性は、非常に難しく、目に見えるものではない。だからこそ、ヨガの実践が大切。プラクティス、プラクティス、プラクティス。プラクティスなしでは全て無駄になってしまう。」

しかし、アーサナやプラーナヤーマはヨガの実践の一部であり、哲学的な探究が残りの部分を形成している。哲学的な探究とは、自身の心の洞窟で煌めく、すべてを引き受けるための秘密の要素である愛と献身の心の光のことである。そして、繰り返し、繰り返し、聖典のなかで示されているように、その心の洞窟にこそ神が存在するのである。グルジのヨガのシステムを考える時、彼の伝えてきたヨガを、最初に心身に対して置くべきである。それは、私達自身が肉体化された存在だからである。私達は、自分という存在が肉体化されたものであるという事実を否定してはならない。しかし、グルジのヨガへの情熱は、ただ単に身体的なところにとどまるものではない。身体的なヨガの実践は、その入口である。インド神話、ヨガ修行者や聖者・信奉者・神々を愛する人々にまつわる話など、その無数の物語では、ヨガを実践する者はその身体を通じて、いかに幸福と悟りを得たかということが詳しく語られている。これこそが、本質的に、グルジのヨガにおける魂だと、私は考えている。

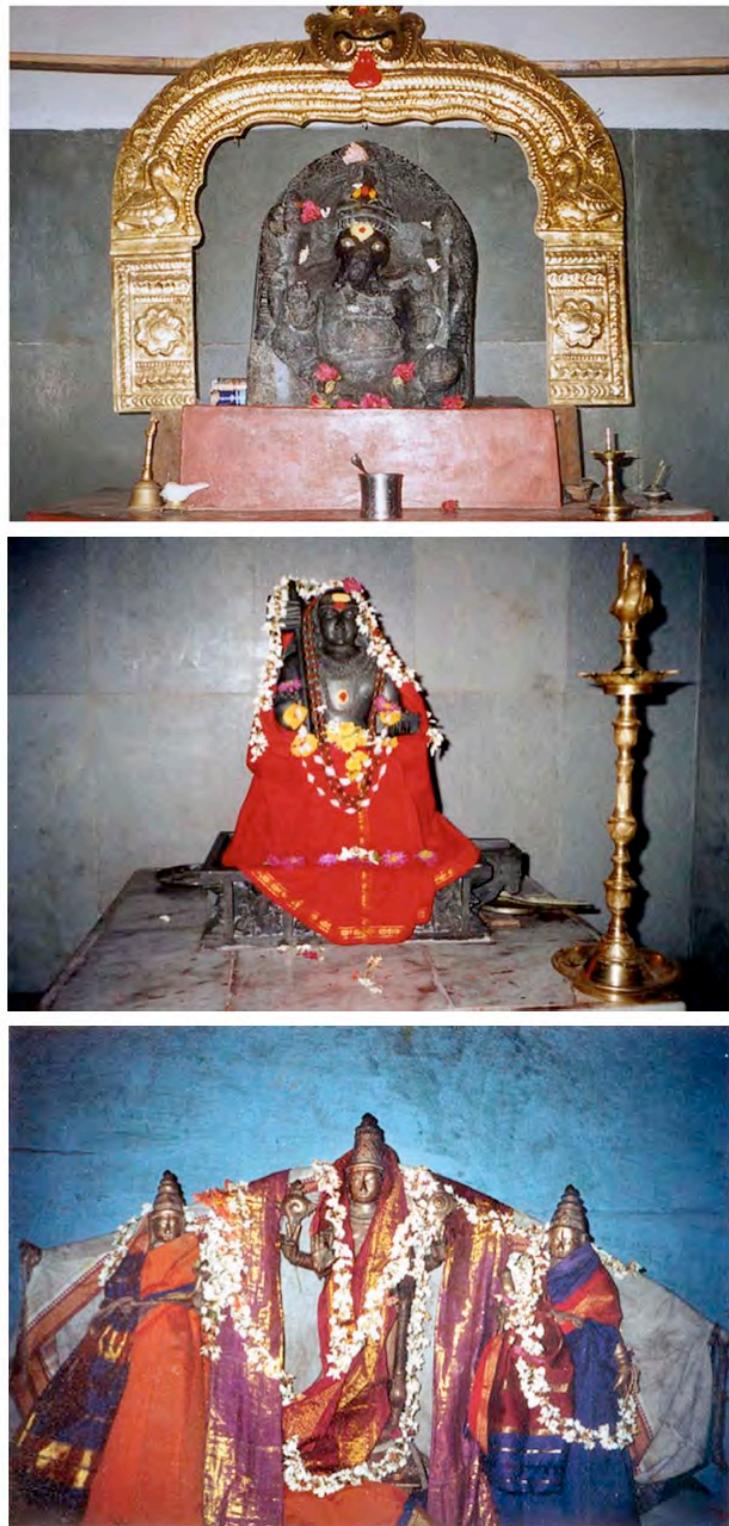
ヘイジ・レンダーとマシュー・ダステイに、彼らの協力と助言に心から感謝を捧げます。

エディ・スターントン：

1991年から2009年にかけてシュリ・K・パタビ・ジョイスのもとでヨガ、チャンティング、哲学を学ぶ。

NYのアシュタンガ・ヨガ・ニューヨークおよびブルーム・ストリート・ガネーシャ・テンプルのディレクター。[www.ayny.org](http://www.ayny.org)

次ページへ続く



コウシカの寺院:ガネーシャ(上)、アディ・シャンカラチャリヤ(中)、ヴィシュヌ(下)、サラダンバ(左下)

#### 脚注

注1 *dig balam kshatriya balam brahma tejo balam balam. Ekena brahmadandena sarvastrani hathani me.*(Valmiki Ramayana 1.56.23)

注2 <http://www.hoysalakarnatakaru.org/origin.htm>

注3 学者によって少なくとも2つの日時が唱えられている。一つは、シュリングエリ・サラダ・ピータ(上記のシャンカラチャリヤの寺院の写真に描写されているのと同じ寺院)の記録に基づいたものが788年から820年である。三代目のアーチャーリヤ以来(シャンカラが初代)、彼らが保管している記録は比較的、保存状態がよい。もう一つの記録はDwarka and Puri Mathsの記録に基づいた紀元前509年から477年のものであり、シャンカラチャリヤの解説書の内容や引用とは矛盾している。<http://www.advaita-vedanta.org/avhp/dating-Sankara.html>

※日本語訳の出典 「バガヴァッド・ギーター」 上村勝彦訳 岩波文庫

※ホイサラ朝:11世紀後半~14世紀初頭にマイソール地方を割拠した王朝